

# 「かわいい」とはどのようなことなのか —— 『少女の友』と『少女世界』の比較を通して ——

渡部 周子

(総合文化学科)

What Kind of Thing is *Kawaii*? *Shojo no Tomo* and Comparison of *Shojo Sekai*

Shuko WATANABE

キーワード: 「かわいい」 少女雑誌 『少女の友』 『少女世界』 *Kawaii*, The girls' magazine, *Shojo no Tomo*, *Shojo Sekai*

## 一、はじめに

「かわいい」について、活発に議論がなされるようになってから、二〇数年が経過している。宮台真司等による『サブカルチャー神話解体』(一九九三年)は、戦前に「かわいい文化」は存在せず、「かわいい」を戦後の若者サブカルチャーのマニフェストだと主張した<sup>(2)</sup>。また、増淵宗一も、『かわいい症候群』(一九九四年)で、戦前の富裕な「少女」は、「かわいい」という言葉を用いなかったと述べる。「かわいい」を戦後の文化とするこれらの知見は、後続の研究者に影響を及ぼしている。たとえば、古賀令子による『「かわいい」の帝国』(青土社 二〇〇九年)は、一九六〇年代に、「戦前の「少女文化」とその「清く正しく美しく」という理想は消失し、新しい女の子たちの(若者)文化に出現したのは、「かわいさ」への志向だった」と述べる<sup>(1)</sup>。しかし、「かわいい」に関する歴史的な観点による研究は未だ十分になされていない。「かわいい」と「少女」が、なぜ繋がりを持つのか、考察する必要がある。「かわいい」とは、大人がつくりだした規範的理念であることを、歴史的な観点で解明したのが、渡部周子による「かわいい」の生成<sup>(5)</sup>(二〇一五年)である。『少女の友』の編集者は、創刊五年面にあたる一九一二年に、「可愛らしい雑誌、上品な雑誌、を作りた」と述べ、読

者もまた「可愛らしい」存在(容姿に優れ、無邪気、善良)であるべきだと主張していることを渡部は明らかにした<sup>(7)</sup>。本稿は、この渡部の先行研究を発展させることを研究目的としている。

## 二、考察の方法

本稿は、渡部による「かわいい」の生成<sup>(2)</sup>(二〇一五年)と方法の面で、共通した点と、新たに導入する点とがある。

まず共通する部分について説明する。

分析時期の中心を、一九一二年とする。『少女の友』(實業之日本社 一九〇八年創刊 一九五五年終刊)の編集部は、この年の四月(第五卷第三号)に他誌への投稿を禁じ<sup>(8)</sup>、八月には投稿作文は「可愛らしく」あるべきだと主張した。つまり、一九一二年は、『少女の友』が独自性を打ち出した時期なのである。

考察の中心は、投稿作文並びにその選評とする。とりわけ、選評に注目するのは、採否の決定権を持つ編集者の考えを知ることのできる、数少ない情報源だからである<sup>(9)</sup>。

続けて、発展的な方法について説明する。

競合誌である『少女世界』(博文館 一九〇六年九月創刊 一九三一

年一〇月終刊)を考察に加える<sup>⑩</sup>。複数雑誌を分析することで、各誌の独自性を問うことができると思えるからである。『少女の友』が掲げた「可愛(らし)い」は、『少女世界』における「愛らしい」という理念を参考にした可能性があると思われ、渡部は「かわいい」の生成(二〇一五年)で指摘している<sup>⑪</sup>。本稿は『少女世界』の動向について比較考察を行うことで、発展をはかる。

### 三、『少女の友』における「可愛(らし)い」

#### 三一、『少女の友』の「少女」の理想

そもそも、「可愛(らし)い」とはどのようなことなのか。誌歌「友ちゃんの歌」を手掛かりに考えてみよう。一九二〇年に『少女の友』の誌面に発表され、愛読者大会等で必ず愛唱されていたという。なお、渡部による「かわいい」の生成(二〇一五年)では、一部分の引用に留まっているが、この歌詞は雑誌の理想を象徴的に示していると考えられるため、全文を引用したい。

- 一、うぐむすがきて春がきて／きれいな花がさくやうな／  
たのしい話をしてくれる／友ちゃんほんとに可愛(かし)いこと
- 二、お伽の国の姫さまの／ひとみのやうにあたたかく／  
わたしを大事になぐさめる／友ちゃんほんとに可愛(かし)いこと
- 三、わたしがひとり室にゐて／ひとりぼつちがさびしいと／  
思へばすぐに笑ひだす／友ちゃんほんとに可愛(かし)いこと
- 四、春、夏、秋、冬かはりなく／日毎日毎にわたしらと／  
だんだんやさしく育ちゆく／友ちゃんほんとに可愛(かし)いこと

(傍線引用者)

「友ちゃん」とは『少女の友』を擬人化した存在であり、「きれいな」の「たのしい」「あたたかく」「やさしく」、そして「すぐに笑ひだす」存在だとされている。また、「友ちゃん」の「たのしい」ところは「花がさく」ようにとされ、その「あたたか」なところは、「お伽の国の姫さまのひ

とみ」のようだとされる。また、「友ちゃん」は、自身の優れた点を、「大事になぐさめる」という他者への愛護、すなわち利他的行動のために用いている。注目すべきは、一から四番のどの歌詞の末尾も、「友ちゃんほんとに可愛(かし)いこと」で終わっていることである。「可愛(かし)いこと」という言葉によって、『少女の友』の理想を意味したのである。

#### 三一、『少女の友』の作文観

「少女」が文章を書くにあたって、「可愛(らし)い」とは、どのような意味を持つのだろうか。渡部は「かわいい」の生成(二〇一五年)で、読者の作文を複数挙げ、この点を考察している。ここでは、この研究成果より、中島静江による「お庭の茂み」を示すに留める。

お庭の茂みに釣ったハンモックの上では、愛ちゃんの可愛(かし)いびきが聞えます。目を覚まさぬ様に私はソーツとそのハンモックに乗って、編物をして居ました。築山の陰から、お書齋で裁縫をしていらつしやるお姉様が見えます。若葉を訪れた涼しい風が時々愛ちゃんのリボンをふるはせます。睫毛の長い、黒い大きい瞳の、林檎の様な頬を持った愛ちゃんは、本当に可愛(かし)いと思ひました。と何に驚いたか、パツチリと目を開けました。そしてニツコリして、一寸首をかしげた姿が実にかはゆう御座います。青葉の間から照る真昼の強い日光に、愛ちゃんの額ににじんだ汗が光りました。(傍線引用者)

(評)大へんかはゆく出来ました。ところ／＼無くても好い文句がありました。よく読んでおいて下さい。

『少女の友』の主筆星野水裏は、定型的表現を否定的に捉え、口語で表現することを重視しており、この中島の言文一致による作文も、そうした星野の作文観と合致している<sup>⑫</sup>。

また、家庭という私領域を舞台とし、幼児に対する愛護の感情、「手芸」や「裁縫」という家政をモチーフとして描いている。愛護の対象

となる幼児は、美麗な容姿をしており、愛情という精神的な資質と容貌という物質的な形態を、「可愛い」という理念は複合するものであると、渡部は解釈している。<sup>17)</sup>

「可愛(らし)い」とは、将来良妻賢母となる上で、少女が持つべきとされる資質と合致するものとされているのである。こうした特徴を持つ、「可愛らしい文章」を『少女の友』は一九二二年八月より、全面的に推奨するようになる。

しかし、当時、この変化は、必ずしも肯定的に受け止められるものではなかったことは、次の編集者の発言がよく示している。

この頃、少女の友の作文は、大変つまらなくなつたなどいふ噂ををりくき、ますが、私共の眼から見れば、よほどよくなつたとしか思はれません。なるほど以前には今よりも華やかな文章、むづかしい文章が沢山あつてをりましたが、只今はそんなものは比較的になくなりしました。そして比較的は無邪気な平易な文章が多くなりました。華やかなむづかしい文章が必ずしもよい文章ではありません。時には平易な可愛らしい文章の中に却つていふにはれぬ名文が潜んでゐることがございます。少女の友は少女の雑誌ですから、なるべく少女らしい作文を歓迎いたします。<sup>18)</sup>

(傍線引用者)

このように、投書の採択基準が、この時期変化したこと、その変化は「つまらなくなつた」という噂となつたのだという。それでも、編集者は、「平易な可愛らしい文章」を「少女らしい」と肯定している。

また、同じ八月に、星野による「碧梧桐の窓より」にも、投稿作文に対する見解が示されている。

小石川のハムレット様から、少女の友の作文は皆下手だと言つて来ました。形容詞が多いから上手だ、むづかしいから上手だと仰つしやるお言葉は少し御無理でせう。よく御覧なすつて下さい。

私共は寧ろ、少女の身でどうしてこんなうまく書けるかと、驚いて居る程でございます。<sup>19)</sup> (傍線引用者)

「少女の身でどうしてこんなうまく書けるか」驚いているという星野の言葉が示すように、『少女の友』は、「少女」には「少女」なりの基準があると考へていた。「少女の友の作文は皆下手」という酷評をわざわざ取り上げ、星野自身が反論に打つて出たのはなぜなのだろうか。それはこの批判が、小石川のハムレットと名乗る一読者に留まるものではなく、当時、「形容詞が多い」「むづかしい」ものを「上手」とする見方に一定の一般性があつたのではないか。しかし、『少女の友』の編集者は「可愛(らし)い」文章を記すべしという考えを撤回することとはなかつた。二年後の一九一四年に、編集者は次のように述べる。

意味も知らないむづかしい言葉を使つて喜んだり、うはべばかり飾つて中身の無い美しさを誇つたりする少女はよくありません。本誌を読めばそんな少女はなくなります。

日本の少女は無邪気でなければいかぬ、可愛らしくなければいかぬ、顔も心もいつもニコニコしてゐなければいかぬ、といふのが本誌の主義です。<sup>20)</sup>

「むづかしい言葉」や、「うはべばかり飾つて中身の無い美しさ」を否定したのは、次の章で取り上げる競合雑誌『少女世界』の動向を意識してのことではないかと思われる。

このようにして、編集者がつくりだした、「可愛(らし)い」という規範は、一過性のものでは終わらず、雑誌の「伝統」と化すこととなる。編集者は次のように語っている。

少女の友には創刊当時より一貫した伝統があります。それは、あくまで、上品な、可愛らしい、家族的な雑誌をつくることです。少女の友が、今まで、二十数年間、その声価を維持することの出

来たのは、たしかに、このためだと思ひます。<sup>(21)</sup>

#### 四、『少女世界』における「愛らしさ」と「華やかな情調」の賞賛

##### 四一、『少女世界』の「少女」の理想

競合誌である『少女世界』は、「少女」の理想について、どのような考えを有していたのだろうか。『少女世界』は、「少女」を「地上に於て、最も愛らしい」と見なしていた。『少女世界』の主筆であった沼田笠峰は、「無邪気で快活な少女は愛らしい」「素直な少女は愛らしい」と述べている。これら『少女の友』に先んじた「愛らしい」という理想は、おそらく『少女の友』の「可愛(らし)い」の影響源になっているのではないかと思われる。なお、沼田は、一人の「女学生」の特徴を述べるに際し、「小柄の可愛い顔」「愛らしい眼もと」と記している。「可愛」と「愛らしい」は、類似性があるようにも見える。ただし、『少女世界』は、「愛らしい姿と、うるはしい心とを、いよく優れさせるには、たゞ学を励み行ひを修めるのが第一」であり、「有益な書物」を読むように推奨している。「学を励む」とより「愛らしい姿」になるといふのは、同時期の『少女の友』の「可愛(らし)い」の捉え方とは異なっている。ただし、「少女」に相応しい「学」とは、限定的なものであった。この点は後述する。

また、『少女世界』は、「愛らしい」ことだけでなく、「華やか」なことを「少女」の特徴だと捉えていた。次のように、沼田は、述べている。

少女は華やかなもの、而してまた純潔な優しい心をもつたものであります。華やかであるだけ、それだけ彼等の動作は些細なことも際立つて見えますし、また純潔な心のはたらきとして、その行ひは無邪気で快活であります。<sup>(22)</sup>

「華やか」であることを賞賛するという点は、『少女の友』とは異なっている。この「少女」の美質の捉え方の違いは、「少女」らしい身なりのあり方についても、差を生じさせている。『少女世界』の沼田

は、「少女」がリボンを用いる時には、「少女」の「自由の選択に任しい」と考えていた。<sup>(23)</sup> また、リボンは男性の「ネクタイ」に匹敵する程重要なもので、「少女」を一目見た時に、「一番美しく見えるのは」(おそらく真つ先に目に付くことだと思われる)「ヒラ／＼と揺れるリボン」だと述べる。<sup>(24)</sup> また、「華美」であったり「中の広い」ものを使うのも、「上下とも対のリボン」をかけたたり「色を違へ」て複数使うことも、スタイルや好み次第だと考えていた。<sup>(25)</sup>

『少女の友』の星野は、表紙絵や口絵の「少女」は、「リボンなども馬鹿／＼しく大きいものはよして、淑女の美観を傷けない程度」とし、その数は「なるべく一つ」とした。<sup>(26)</sup> (絵画に対する見解ではあるものの)「少女」の装いに対する星野の理想をうかがうことができる。このように、『少女の友』と『少女世界』は、「華やか」という要素について、肯定するか否定するかという点で、相違があったのである。

##### 四二、『少女世界』の作文観

続けて、「少女」に相応しい作文について確認したい。

『少女世界』は、「少女」の文体は、ちやうど愛らしい少女の心と同じやうに、やさしく美しいのが宜しからう」とし、否定すべきは、「男子とまがふばかりに雄々しい文章を作ツたり、角立ツた文字を書いたりする」こととした。<sup>(27)</sup>

女学部の入賞作品で、選評に「愛らしい」という言葉を用いた作文をここで見てみたい。志賀静子による「時絵の小箱」である。

鶯の音もとだえて、梅の香のみゆるう流るゝ窓に、針持つ手を休めて、緋房のついた時絵の小箱を又開けて見ました。紅や青や黄の小布を集めて縫つた三枚重ね——それは姉様の大切な大切な五寸の人形でございます。今にも笑ひさうな口元！ 白と赤と紫と重なつた袖口のふくらみ!! ゼット胸に抱いて過ぎし日の印象——それは桃の花にしと／＼と春雨のそ／＼日でした。お離れから妙にもれる琴の音をきゝつゝ、暖かい姉様の御胸に抱か

れて聴きし京の春!! 又してもくり返して、心ゆくまで想ひました。<sup>34)</sup>

(評) 新らしい思想ではありませんけれど、少女のやさしい情緒が、愛らしいお人形によつて、現はされてゐると思ひます。甲賞としてメダルを呈す。(傍線引用者)

作文の視点人物がかつて幼かった頃、(人形のように) 胸に抱いてくれた、優しい姉の思い出を語っている。「針持つ手」とあり、家政というモチーフが見られるのは、『少女の友』掲載の中島静江による「お庭の茂み」と共通する部分である。ただし、相違点もある。『少女の友』の中島の作文は、視点人物にとつての現在を記しており、より日常性を有していることである。

一方、『少女世界』の「蒔絵の小箱」は、過去すなわち「過ぎし日」の回顧という、視点人物の想念の中の情景を描いている。そして、「心ゆくまで想う」ことを、「少女のやさしい情緒」と捉え、それを象徴的に示す「お人形」を「愛らしい」と選者は捉えるのである。<sup>35)</sup>

なお、『少女世界』は、「愛らしい」ことの他にも「少女」の文章に特徴的だと考える要素があった。それは既に指摘した「華やか」なことである。同誌掲載の編集者の手による「少女の文章」は、「大人や老人の真似の出来ない若々しい感じ、華やかな情調のたゞようであるのは、少女の文章の特色として誇つてもよいでせう」と述べる。<sup>36)</sup> ここで、『少女世界』において、「華やか」と賞賛された作文、瀬川もと子による「乙女椿咲く窓」を見てみよう。

水鉢の辺りの南天の茂みに、小鳥が囀つてゐます。可愛らしい妹が人形のメリーさんをだつこして、「母様の根掛の様だわ」つて云つた、その鈴なりの赤い実をあさつてゐます、小鳥よ! お前は美しい乙女椿の花を知らないの? つと花あやめ模様の朱塗の手箱から、こぼれ出たりポンの幾筋に、柔らかい光が華かに映えてゐます。先づ真紅のは、山紫に水明かな詩の都に落花の雪を踏み分

けた時! セイジ色に勿忘草の朧染のは、松の緑に砂白く浪の花散る須磨の浦に遊んだ時!! 只もうパストの追想か、綾糸の様に美しくほぐれてまゐりました。<sup>38)</sup>

選者は、「華やかな書き方で、而もどこか淡い悲しみがたゞようてゐます」と評す。<sup>39)</sup> この作文が描く時期は、「南天」や「乙女椿」という季語から見て春だと思われる。作文の視点人物は屋内の一室から、「水鉢の辺りの南天の茂み」のある庭と、部屋の「朱塗の手箱」を眺めている。しかし、現在の時空間に、書き手のイマジネーションは留まるものではない。間近にある「鈴なりの赤い実」の特徴を描写するにあつても、「母様の根掛の様」と比喻するが、これはかつて「可愛らしい妹」が語つたことだという。さらに「朱塗の手箱」からこぼれ出るリボンの色から連想が広がり、「山紫に水明かな詩の都」「須磨の浦」と様々な空間に、また時間も「落花の雪」「松の緑」「勿忘草」「砂白く」と様々な季節に広がつて行く。これらの場所に、書き手が実際に行つたのか、それとも想像なの定かではない。「綾糸の様に美しくほぐれ」ているという言葉が象徴するように、自身の目の前の状況を写實的に描くのではなく、今ではない時間、ここではない場所の事象を、技巧的な手法によつて象徴的に記している。

『日本児童文学大事典』(一九九三年)は、「抒情的雰囲気を中心に、娯楽と教養の読物と読者からの投書を中心に編集され、明治末から大正にかけて博文館の『少女世界』とともに少女の人気を集めた」雑誌と『少女の友』を評している。<sup>40)</sup> しかし、これは一九一〇年代の『少女の友』の実態にはそぐわず、むしろ、「抒情的雰囲気」と「投書を中心」に編集された雑誌という特徴は、『少女世界』にこそ当てはまる。<sup>41)</sup>

ただし、『少女世界』も、手放して「華やか」なことを賞賛したわけではない。「少女」の欠点として目につくのは、「文章を華やかにしようとして、むやみに辞句を飾り立てる」ことであり、「知らず識らず内容が貧弱」になる。<sup>42)</sup> 「文章は思想が本で、辞句は末」であり、「思想が豊かでない」から「人の真似をしたり、些細なことをもさも仰々しく誇

大」することになる。<sup>(43)</sup> 避けるべきなのは、無知から来る内容の「貧弱」さであり、装飾の過剰さである。<sup>(44)</sup>

『少女世界』の編集者は、「少女」が文章を書くために必要なのは、「多く読むこと、正しく観察すること、大胆に作つて見ること」、これらを「作文上達の秘訣」だと説明し、少女たちが「古今の名文を読み味はつて」、「句法に慣れ、また辞句も豊富」になるように説いていく。<sup>(45)</sup> つまり、文章を記すことを、知識を根幹に置き、修練を通して成し得る、創造的な行為だと捉えているのである。ただし、『少女世界』の編集者も、あらゆる文章が「少女」に必要なとは考えてはいなかった。必要だとされたのは、「叙事文と叙情文」である。不必要なのは、「小説」と「論文」である。すなわち、「論文」は、「何かの事柄について、それを議論するのに使ふ文章、新聞の論説など」で「少女には余り必要ではありません」と位置付け、「小説も、少女にはまだ不必要」であると述べる。<sup>(46)</sup> これらの文章を書くことができれば、自己の意見を社会に対して表明する方法を得られない。とりわけ、「論文」を読み書きする力は、知識人男性にとつては重要な能力だったと考えられる。このように、「少女」に相応しい「学」とは、当時の学問体系から見れば周縁的で、限定的なものであった。

### おわりに

一九一二年の『少女の友』と『少女世界』を比較した結果明らかになつたのは、次のことである。

『少女世界』では、「少女」自身と、「少女」の書く作文が「愛らしい」「華やか」であることを美質だと捉え、これらを「学を励み」「思想が豊か」であることと結びつけて語った。また、文章を記すことを、知識を根幹に置き、修練を通して成し得る、創造的な行為だと捉えた。ただし、あらゆる文章が「少女」に必要なわけではなく、たとえば知識人男性にとつては必須である「論文」は、不必要だとされた。

『少女の友』では、読者の「少女」自身も、「少女」の書く文章も「可愛(らしい)」「ことを求めた。そして、「華やか」「むづかしい」という

ことを否定した。『少女世界』では(限定的であるとはいえ)肯定していた、「学」や「思想」を否定するものだった。

この二誌は、双方とも当時女性の模範的役割とされた良妻賢母と、「少女」のジェンダー規範が合致することを意識していた。ただし、その解釈は二誌で異なっており、それぞれ「可愛(らしい)」「愛らしい」として、理念化した。

以上が二誌の比較を通して、明らかにできたことであり、「かわいい」という規範について、渡部による「かわいい」の生成(二〇一五年)の知見を発展させるといふ、本稿の課題を果たすことができたと思われる。今後の課題は、規範からの逸脱の諸相について問うことであり、これについては別の機会に論じたい。

### (凡例)

引用に際して、旧字体の漢字、変体仮名及び異体時等は、原則として新字体・常用字体に改めた。ただし、固有名詞に関しては、その限りではない。仮名遣い、送り仮名、括弧は、明らかな誤り以外は原文表記を基本とした。振り仮名、強調記号、字下げについては原文に従わず、適宜省略したり、補っている。年号は西暦で表記した。

### (謝辞)

本研究はJSPS科研費15K01938の助成を受けたものです。

日本児童文学学会第五七回研究大会では、発表の機会をいただき、御礼申し上げます。本稿にまとめるにあたって、問題設定や対象資料を広げるといった、発展的な変更をしております。

### (注)

(1) 前提として、「かわいい」という言葉の本稿における位置付けを確認する。『日本国語大辞典』(第二版 JK公開 二〇〇七年)

の「かわゆい」の語源説は、一番目「カホハユシ(顔映)の略」。(大言海・日本語の年輪Ⅱ大野晋)。カホハシイ(顔羞)の義(俚言集

- 「愛慕」であり、二番目「カアイ(可愛)の転訛(一時随筆・和訓栞)」三番目「カは心にかかること。ハユシはある方向に進むことから、ハヤシの意(答問雑稿)」となっている。本稿は、「カアイ(可愛)の転訛」という説を支持し、また松下貞三の研究に依拠し、「愛慕顧念して去りがたい」という「愛」の原義の現代日本語的表現の展開だと捉える。加えて、「かはい」と「かはいらしい」は、主体と客体とを明確に区分できず、意味・用法は限定できないという松下の見解に依拠し、「可愛い」と「可愛らしい」を同等に扱う(『漢語「愛」とその複合語・思想から見た国語史』あぼろん社 一九八二年 二二七―二二八頁)。
- (2) 宮台真司 石原英樹 大塚明子『増補 サブカルチャー神話解 体——少女・音楽・マンガ・性の変容と現在』筑摩書房〔ちくま文庫〕二〇〇七年 (パルコ出版局 一九九三年)
- (3) 増淵宗一『かわいい症候群』日本放送出版協会 一九九四年 二四―二五頁
- (4) 古賀令子『かわいいの帝国——モードとメディアと女の子たち』青土社 二〇〇九年 三三頁
- (5) 渡部周子『かわいいの生成——一九一〇年代の『少女の友』を中心として』『大阪国際児童文学振興財団研究紀要』二八号 二〇一五年三月
- (6) 無署名「終刊号を編集し終りて」『少女の友』第五卷第一四号 實業之日本社 一九二二年二月 七六頁
- (7) 注5に同じ
- (8) 「よく方々の雑誌にお名前を見ることがございますが、選者はなるべくこんなお方は取らない方針にいたしました」と掲載方針の変化を語っている(無署名「選者」『少女の友』第五卷第三号、實業之日本社 一九二二年三月 九一頁)。
- (9) 文中に「可愛(らし)い」という言葉を用いた投稿作文はあるが、雑誌の作り手の意図を明らかにするために、本稿では選評に焦点化した。
- (10) 『少女世界』と『少女の友』の編集方針の差異を、ジェンダー規範という観点から分析した先行研究として、久米依子による『少女小説』の生成——ジェンダー・ポリテクスの世紀(青弓社 二〇一三年)を挙げることができる。久米は『少女の友』は「家庭の外部の世界を垣間見せまいとする姿勢」(同前 二〇〇頁)を、一方『少女世界』は「投書家を育てようとするような、読者の現実的自己実現に関与しようとする姿勢」(同前 二〇一頁)を有していたと指摘する。
- (11) 注5に同じ
- (12) 無署名「友ちゃんの歌」『少女の友』第一三卷第四号 實業之日本社 一九二〇年四月 七二―七三頁
- (13) 「かはい」とルビが振られており、「可愛」を「かはい」と発音することがあったと、知ることができる。
- (14) 中島静江「お庭の茂み」『少女の友』第五卷第九号 實業之日本社 一九二二年八月 九八頁
- (15) 無署名「選評」『少女の友』第五卷第九号 實業之日本社 一九二二年八月 九八頁
- (16) 渡部前掲論文 五一頁 『少女の友』の投稿作文を分析した今田絵里香は、「女子読者たちは、過去の作文教育で称揚されていた文語体に魅了」されず、これは高等女学校では漢文は、科目目として存在せず、「学歴獲得」「職業獲得」に結びつかなかったからとする(『少年』『少女』の誕生『ミネルヴァ書房 二〇一九年 一七〇―一七一頁)。しかし、同時期の『少女世界』の投稿作文では、『少女の友』とも、学校による作文教育とも異なる文体が用いられていた。詳細は次の章で後述する。なお、今田は、「少女向けのメディアに『かわいい少女』という表象が導入されたのは、戦後」と見る(同前 三頁)。しかし、大正初期の『少女の友』で、「可愛(らし)い」が規範的理念であったことは、この章に挙げた事例からも明らかである。
- (17) 注5に同じ 五二頁

- (18) 無署名「選者言」『少女の友』第五卷第九号 實業之日本社 一九一二年八月 九九頁
- (19) 星野水裏「碧梧桐の窓より」『少女の友』第五卷第九号 實業之日本社 一九一二年八月 九一頁
- (20) 無署名「編集室より」『少女の友』七卷一四号 實業之日本社 一九一四年二月 一〇四頁
- (21) 無署名「編集局より」『少女の友』第二卷七号 實業之日本社 一九二九年七月 三〇二頁
- (22) 『少女世界』の「少女」理念を考察するにあたって、『少女世界』本誌に加え、『少女スケッチ』(一九一〇年)『少女百話』(一九一一年)『新少女スケッチ』(一九一二年)を参照する。いずれも、沼田笠峰名義で博文館より発行しているが、巻頭の「はしがき」に「少女世界編集局にて 沼田笠峰」と記載がある(また管見の限り『少女世界』の再録記事が多く見られる)。このことから、『少女世界』の編集方針をはかるのに適当な資料だと考える。
- (23) 沼田笠峰「少女教室」『少女世界』第二卷第三号 博文館 一九〇七年二月 一一〇頁
- (24) 沼田笠峰「少女百話」博文館 一九一一年 二七六頁
- (25) 沼田笠峰「少女スケッチ」博文館 一九一〇年 四〇頁
- (26) 同前 一二六頁
- (27) 同前 一三三頁
- (28) 沼田笠峰「はしがき」『新少女スケッチ』博文館 一九一二年巻頭
- (29) 同前 一八四―一八五頁
- (30) 沼田前掲書 一九一一年 二五一―二五三頁
- (31) 同前 二五五頁
- (32) 星野水裏「再び編集しながら」『少女の友』第九卷第一号 實業之日本社 一九一六年一月 八五頁
- (33) 無署名「美文の作り方」『少女世界』第三卷第六号 博文館 一九〇八年四月 七九頁
- (34) 志賀静子「時絵の小箱」『少女世界』第七卷三号 博文館 一九一二年二月 九二頁
- (35) 無署名「選評」『少女世界』第七卷三号 博文館 一九一二年二月 九二頁
- (36) なお、一九一二年の一年間の選外作の選評であれば、「可愛(らし)い」という言葉を見ることができ、しかし入選作の選評中に「可愛(らし)い」という言葉は見られない。『少女世界』では、優れた作文を「可愛(らし)い」とは見なさなかったのではないかと思われる。この点についての詳細は、課題として残されている。
- (37) 無署名「少女の文章」『少女世界』第七卷第一四号 博文館 一九一二年一〇月 四五頁
- (38) 瀬川もと子「乙女椿咲く窓」『少女世界』博文館 第七卷第三号 一九一二年一月 九二頁
- (39) 無署名「選評」『少女世界』博文館 第七卷第三号 一九一二年一月 九二頁
- (40) 遠藤寛子「少女の友」大阪国際児童文学館編『日本児童文学大事典』第二卷 大日本図書株式会社 一九九三年 五六四頁
- (41) 嵯峨景子は、『少女世界』が創出した、「少女の率直な感情や美しさをあらわす「新しい文体」は、「明治末期の少女雑誌の中で急速に広まり、少女たちの間で用いられるようになっていった」と指摘する(「明治末期の少女雑誌にみる投稿作文と文体形成——少女文化の美学と言葉の世界の再考へ向けて」(「コンテンツ文化史研究」七 二〇一二年四月 五六頁)。嵯峨が根拠とするのは、一九一二年に誠文館から出版された『少女模範文集』『続・少女模範文集』『現代少女書簡文範』『続・少女書簡文範』である。嵯峨は、『少女模範文集』の広告文は、「少女世界、少女之友、少女、少女界等の作文欄に掲載された才媛約二百名の作を選んだもの。最も新らしい、最も美しい作文のお手本としてこの本よりよいものは外にありません」と記しており、これを根拠に「当時の有力な少女雑誌から選ばれた少女投稿作文集」だとみなしている(同



前 五四頁)。なお、同じ書籍であっても、版によって広告の掲載の有無や、内容の異同があると推察される(筆者の確認した、国会図書館収蔵の『少女模範文集』二九一年、初版に、この広告を確認できなかった。国会図書館収蔵『続・少女模範文集』二九二年、初版)には、『少女模範文集』の広告が出されており、ここでは初出誌と執筆者を、「少女世界、少女之友、少女、少女界等の作文欄を通じて誌上の花と唄はる、小才媛約二百名の作」(傍線引用者)と説明する。本稿が指摘したいのは、『少女の友』側は、『少女の友』の作文欄からも優秀なものを選抜してくれとの申込みでしたが、記者は、「お断りをした」と語っていることである(無署名「掲示欄」少女模範文集 溝口白羊編『少女の友』第五巻第五号、實業之日本社、一九二二年四月 一一〇頁)。少女文化における美文の広がりをも、本稿は否定するものではない。しかし、他誌の掲載作と共に収録されることを拒んだという編集者の発言に、この時期の『少女の友』の独自性に対する強い拘りを、読み取ることができよう。

(42) 注37に同じ 四五頁

(43) 同前 四六頁

(44) 嵯峨は、『少女世界』では一九〇八年の時点では「少女らしい優しさや優美さを求め、美しい字句や流麗な文体を用いるよう指導していた」と指摘する。しかし、投書欄における「叙情性・感傷性の高い文体を用いた短文は一九一〇年、一九一一年頃にその数が急増」し、一九二二年には逆に「装飾的な文章を戒めて文章に「思想」を求めるという指導方針の転換がなされた」と述べる(『少女世界』読者投稿文にみる「美文」の出現と「少女」規範——吉屋信子『花物語』以前の文章表現をめぐって『情報学研究』八〇 二〇 一一年三月 一〇九—一一二頁)ここで筆者が指摘したいのは、「優しさや優美さ」「美しい字句や流麗な文体」を求めたと嵯峨が捉える一九〇八年に、編集者は「思想」を重要だと主張していたことである。編集者は、「辞句や文体は、抑も末」であり「知識を

広め徳操を修めて、思想を高尙にするやうに心がけねばならぬ」と述べる(注33に同じ、七八頁)。一九〇八年より「思想を高尙」にすることを前提と見なしていた。嵯峨がいうように、「美文表現が一般化するにつれ、その過剰さを危ぶ」んだ側面もあるかもしれない(嵯峨前掲論文 二〇一一年 一一二頁)。しかし、『少女世界』が否定したのは、「美文」を書くこと自体というよりも、無知から来る内容の「貧弱」さだったのではないか。それは、一九〇八年に編集者が「姿は優雅でも、精神には強い力がある、これでこそ日本の少女と言ふべきでせう。(中略)文章もまた、その通りなのです」(注33に同じ、七七頁)と語る言葉に象徴的に示されている。なお、本稿の四一二と重複しつつも、強調したいのは、「思想」や「知識」を重視するといっても、「少女」に相応しい「学」は限定的なものであり、男性と同等の「思想」や「知識」を求めるものではなかったことである。

(45) 無署名「叙事作文法」『少女世界』第七巻第一四号 博文館 一九二二年一〇月 五八頁

(46) 無署名「文章の種類」『少女世界』第三巻第六号 博文館 一九〇八年四月 六四頁 なお、「小説」はこの時点では不必要とされているが、三年後の『少女世界』第六巻第六号(一九一一年四月)に読者からの投稿少女小説を掲載している。

(47) 小山静子『良妻賢母という規範』勁草書房 一九九一年 深谷昌志『良妻賢母主義の教育』黎明書房 一九六六年

(受稿 令和二年九月三十日、受理 令和二年十一月四日)

